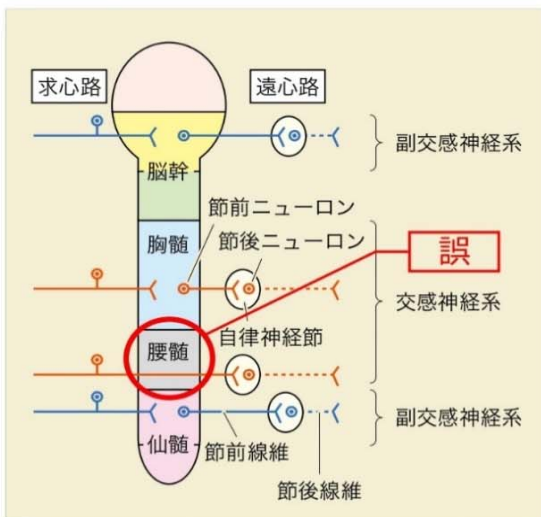


本書におきまして、記載内容に誤りがございました。下記の通り訂正し、お詫び申し上げます。

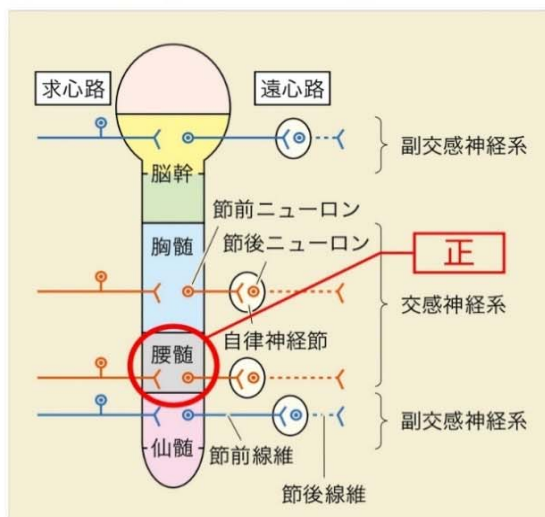
頁	訂正箇所	誤	正
98	上から2行目	終板電位が閾値に達すると活動電位が発生して、～	終板電位が 閾膜電位 に達すると活動電位が発生して、～
244	下から3行目	歯根膜および歯肉の受容器の一部と咀嚼筋筋紡錘を支配する。	歯根膜および歯肉の受容器の一部と 閉口筋筋紡錘 を支配する。
247	表15-2 口腔領域における感覚閾値 感覚閾値が低い部位(敏感な部位)の順位	痛覚 (Frey毛痛覚閾値) 1. 硬口蓋	痛覚 (Frey毛痛覚閾値) 1. 軟 口蓋
252	上から2～5行目 文章差し替え	受容器は、単根歯および複根歯ともに歯根膜中間部に多く、複雑性終末が多数を占めている。歯頸部の歯根膜には受容器の数は少なく、単純性終末である。根尖部では終末はみられない。大臼歯根間中隔頂付近の歯根膜における終末の存在はきわめて少ない。 受容器として、ルフィニ小体、クラウゼ小体および自由神経終末がみられる。また、各歯の歯根膜における受容器の密度は、前歯、小臼歯および大臼歯の順に小さくなる。	歯根膜には、主に自由神経終末とルフィニ小体が感覚受容器として存在しており、これらの分布には歯根の部位による局在がある。歯頸部の歯根膜には、三叉神経節に細胞体をもつ自由神経終末が分布しているが、その数は少ない。 中間部の歯根膜には、三叉神経節に細胞体をもつ自由神経終末やルフィニ小体が、三叉神経中脳路核に由来するルフィニ小体より多く分布している。 根尖部の歯根膜には、自由神経終末とルフィニ小体が分布しており、三叉神経中脳路核に細胞体をもつルフィニ小体が多くみられる。
300	下から9行目	(2) 咀嚼指数および咀嚼効率による方法：石橋の方法	(2) 咀嚼指数および咀嚼効率による方法： 石原 の方法
301	上から12行目	30回咀嚼後のグミゼリーからの～	20秒 咀嚼後のグミゼリーからの～

32頁

■ 図 2-25 ■ 節前ニューロンと節後ニューロン



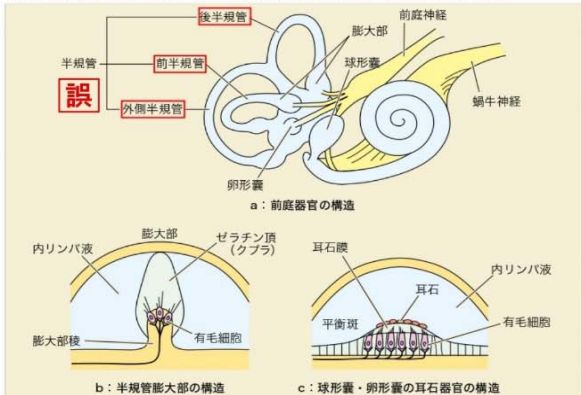
■ 図 2-25 ■ 節前ニューロンと節後ニューロン



81頁

■ 図 3-15 ■ ヒト平衡感覚器の構造

(外崎肇一、村本和世：『ビジュアル生理学・口腔生理学』(和泉博之ほか編)、第3版、学研書院、2014)より転載



■ 図 3-15 ■ ヒト平衡感覚器の構造

(外崎肇一、村本和世：『ビジュアル生理学・口腔生理学』(和泉博之ほか編)、第3版、学研書院、2014)より転載

